



Title	グギ・ワ・ジオンゴ初期三部作に見られる土地意識
Author(s)	中川, 美保子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2026, 37, p. 92-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104449
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

グギ・ワ・ジオンゴ初期三部作に見られる土地意識*

Land consciousness in the early trilogy of Ngugi wa Thiong'o

中川 美保子**

Nakagawa Mihoko

0. はじめに

ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴ(1938-2025)の初期三部作『川を隔てて (*The River Between*)』(Ngugi 1965)¹、『泣くな、わが子よ (*Weep Not, Child*)』(Ngugi 1964)、『一粒の麦 (*A Grain of Wheat*)』(Ngugi 1967)は植民地主義の脅威やマウマウ闘争²、それらが人びとの精神的・物質的生活に残したものについて扱った小説であるが、その中の多くの場面において土地が重要な役割を占めている。ギクユの人びとにとって母なる大地であり、自己の精神のよりどころでもある土地を収奪されたことは、ギクユの人びとをどのような状況に陥らせ、いかなる精神的苦痛を与えたのか。そして、その後どのような影響を及ぼしたのか。

植民地支配によって疎外された土地は、常にケニアが抱える問題の核心であった(Ngugi 1972: 27)とグギが述べていることから、白人の侵入と支配が始まる 1900 年前後から、マウマウ闘争を経て 1963 年のケニア独立に至るまでの半世紀以上にわたる年代記のような三部作『川を隔てて』、『泣くな、わが子よ』、『一粒の麦』において土地に着目することは意義深いと考える。

さらに、グギは人種間、民族間にある対立や反目を乗り越え、協力ができて初めて統一と文化のあるケニア国が誕生するのだという信念を持ち、次のように述べている³。

ケニアの人びとは皆こよなく大地を愛している。これは、われわれに共通する基盤だ。

おそらく伝統的な考えにおいて、常に創造的な生命と肥沃の源として見なされる大地がケニアの人びとを団結させるだろう。ここにケニアの希望がある(Ngugi 1972: 25)。

* 本稿は、2001 年度に大阪外国語大学大学院に提出した修士論文『グギ・ワ・ジオンゴ初期三部作に見られる土地意識』(中川 2002)を再構成し、加筆・修正を行ったものである。

グギ・ワ・ジオンゴ氏の逝去に際し、謹んで哀悼の意を表する。

** 大阪外国語大学大学院 言語社会研究科 博士前期課程修了(2002 年)

M.A., Graduate School of Language and Society, Osaka University of Foreign Studies, 2002

¹ 『川を隔てて』が出版されたのは『泣くな、わが子よ』に次いで長編第二作目だが、執筆した時期からすると年代記のような初期三部作の始まりにあたる。

² 「マウマウ」(Mau Mau)という用語は宮本によると、白人がおそらく意味不明のまま使用してきた用語であるが(宮本・松田編 1997: 439)、便宜上、本稿では「マウマウ闘争」とする。

³ 本稿におけるグギの著作および英語文献からの引用訳は、特記なき限り筆者による。

以上のことから、グギの初期三部作に見られる多様な土地意識を考察し、そして、その土地意識がどのような意味を持つかに本稿の結論を導き出したい。

1. 作品の周辺

1.1. 作者の紹介

グギ・ワ・ジオンゴは、第二次世界大戦が始まる前年の1938年、イギリスの植民地下のケニアで農民の子として生まれた。スコットランド伝道教会が運営する小学校、ギクユ独立学校を経て、1955年アライアンスハイスクールに進学した。1959年、ウガンダのマケレレ大学に進学した頃から活発に創作活動を開始した。1964年、奨学金を得てリーズ大学へ留学後、ナイロビ大学などで教鞭を執った。1977年、ギクユ語戯曲が上演禁止処分を受け、逮捕・拘禁されたのち裁判のないまま釈放された。その後、活動拠点を海外に移した。『泣くな、わが子よ』は形のうえではグギの処女長編小説であり、東アフリカ最初の英語小説である。しかし、グギはのちに英語との決別を宣言し、民族語であるギクユ語作家に転身した。現代アフリカを代表する作家の一人として知られている。

1.2. ギクユの文化

グギ・ワ・ジオンゴ初期三部作に見られる土地意識を研究するうえで、グギの世界観を形成していると思われる、グギ自身が帰属するギクユという民族について見ておく必要がある。以下、ケニア初代大統領でありギクユ人の研究でも知られるジョモ・ケニヤッタの著書『ケニヤ山のふもと』を要約しながら紹介する。

1.2.1 ギクユの民族組織

ギクユの民族組織は、「ムバリ」*mbari* (家族集団)、「ムヒリガ」*moherega* (氏族)、「リイカ」*riika* (年齢階梯制度)から成り立つ。ムバリは血によってつながる夫婦、子供、孫、曾孫たち全部を含む。ムヒリガは同じ氏族名を持ち、遠い昔に一つの家族集団から分かれたと信じられる数個のムバリを集めたものである。リイカは同年に成人または割礼の儀式を受けた年齢集団のメンバーを指す。さまざまな年齢集団の活動によってギクユの民族組織は各世代の中で安定し、そして全民族をあらゆる活動の中で一致団結させる(ケニヤッタ 1962: 17-18)。

1.2.2 割礼

ギクユのもっとも重要な慣習に割礼がある。成人式にあたる割礼の前日には、民族のために責任と義務を果たし、民族の秘密を絶対に明かさないと誓いが立てられ、少年や少女は一人前の男と女として認められる。重要なのはその外科的手術よりもそれによって

受ける心理的作用である。割礼は、教育、社会、道徳、宗教上のつながりを持つ一つの体制の真髄と見なされる。民族の道徳律が割礼と結ばれており、この慣習が全民族組織の統一を象徴しているのである。割礼の儀式をとおして、子供たちは個人の子から民族全体の子として生まれ変わる。

少女の割礼にあたる陰核切除を宣教師が禁止したことから、教育上も宗教上も宣教師の影響を受けないギクユ独立学校の設立が広まった(ケニヤッタ 1962: 113-131)。

1.2.3 ギクユ創世の神話

三作品に共通して現れるのがギクユ創世の神話である。神話によれば、人間が地上に住み始めた原初に、民族の始祖であるギクユという男が、宇宙の分配主であり万物の創造主である「ンガイ」*Ngai* (グギの作中では「ムルング」*Murungu* と呼ばれる)から谷、川、森、鳥と獣、その他あらゆる恵みのある土地を与えられた。同時にンガイは休息所および奇跡のしるしとして神秘の山ケレーニャガ(ケニア山)を作り、ギクユを山頂に連れて行き、ギクユに与えた土地の美しさを見せた。ギクユは、犠牲を捧げてケレーニャガに向かって両手をあげて願えば助けに来ると教えられたとおりに願い、ンガイから美しい妻ムンビを与えられた。この二人がギクユの始祖とされている(ケニヤッタ 1962: 18-19)。

このギクユ創世の神話は、ギクユの人びとにとって、土地は本来自分たちが祖先から受け継いできたものであり、自分たちこそが土地の真の継承者であることを証明するものである。それは創造主ンガイから与えられた神聖な大地が神と交わる唯一の手段であることを物語る。ギクユ創世の神話はギクユの人びとに自分たちは何者であるか、自分たちにとって土地とはどのような意味を持つものかを再認識させ、さらに、ギクユという民族を意識させ、人びとを団結させる役割を果たす。なぜなら、ギクユはだれもが原初の男女であるギクユとムンビに祖先をさかのぼることができるからである。

1.2.4 ムゴ・ワ・キビロの予言

ギクユの間で語り継がれている伝説がある。それは、偉大な魔術師ムゴ・ワ・キビロが語ったとされる予言である。蝶の羽に似た衣服を着た人たち、つまり白人がやってきて悪事を行い、ギクユの土地を欲しがり、ギクユからいっさいのものを取り上げてしまうと予言したとされている(ケニヤッタ 1962: 47-48)。

ムゴはグギの作品においてたびたび描かれ、創世の神話と白人の侵入に関連づけて語られている。『川を隔てて』ではムゴが自分の子孫がギクユを救うと予言し、『泣くな、わが子よ』ではいつか白人が彼らの国に戻ると予言している⁴。

⁴ 『ケニア山のふもと』には、ムゴが、白人はいずれ自分の国に帰るだろうと予言したとされる記

1.2.5. ギクユの土地所有制度

ジョモ・ケニヤッタは著書『ケニヤ山のふもと』の序文において、ギクユの問題を理解するには、土地所有の問題を正しく把握することが最重要だとしている(ケニヤッタ 1962: 8)。

ギクユではもともと森林の開拓が土地所有の基本原則であった。ギクユの土地は創造主ンガイからギクユに与えられ、その土地に家や畑地をつくった最初の民族がギクユである。そこから人口が増え、個々の家族集団が形成されるようになると、各家族集団が森の一部に杭を打って耕作権と狩猟権を確保した。次第にンガイから与えられた土地が不足するようになったため、南の森林へと移動し、購入によって土地を得るという新しい形態が生まれたのである。父の死後、土地は息子たちへと渡り、長男が名義人となり兄弟を代表して管理した。

また、他人の土地を借りて利用する方法として、友好的に耕作権を認められた「ムホイ」*Mohoi*⁵と、他人の土地に居住し耕作する権利を与えられた「ムサミ」*Mothami*があった(ケニヤッタ 1962: 31-43)。

1.3. 白人の入植からマウマウ闘争に至るまで

マウマウ闘争とは、白人入植者に奪われた土地の奪還を目的として結束された土地自由軍による闘いを指す。このマウマウ闘争は1952年にケニアに非常事態が宣言されたことに始まり、1956年、闘争の最高指導者であったデダン・キマジの逮捕・処刑により事実上、終結したとされる。この闘争に至るまでの背景には、白人の入植という歴史が深く関わっている。

1895年に東アフリカ保護領を宣言して以降、イギリスはモンバサとビクトリア湖を結ぶウガンダ鉄道の建設を開始した。その後、1902年に王地条例が公布され、白人の入植が促進された。それに伴い人頭税、小屋税などさまざまな税制度の強化が進められた。1906年には肥沃で広大な土地がホワイト・ハイランド（白人専用高地）に指定され、非ヨーロッパ人の土地所有が禁止された。ホワイト・ハイランドの大部分がギクユ農民の土地であったという。さらに1920年、アフリカ人の移動を制限し、賃金労働者として動員することを目的としたキパンデ制度も導入された(宮本・松田編 1997:436)。

これらのイギリス植民地政策下で19世紀末ごろから各地で抵抗運動が起こり始めた。1910年頃から各地でアフリカ独自の独立教会が設立され、ミッション教育に反対する独立

述はない。ケニヤッタによると、ギクユの人びとはギクユの土地を訪れたヨーロッパの人たちが長く滞在し続けることはなく、いずれ自国へ帰ると信じていたという(ケニヤッタ 1962: 49-50)。

⁵ 『ケニア山のふもと』では綴りは *Mohoi* とされているが、グギの作品原文 (*Weep Not, Child*) では *Muhoi* と記されている。

学校運動も起こるようになった。1919年には東アフリカ協会が結成され（1924年にギクユ中央協会に改称）、人頭税・小屋税の引き下げ、土地の返還、キパンデ制度の撤回などを掲げて植民地省に抗議を行い、ナイロビなどで大衆集会を開催した。

1944年ケニア・アフリカ人同盟（KAU）が結成され、立法審議会にアフリカ人1議席が認められた。翌年にはジョモ・ケニヤッタがKAUの委員長に就任した。

1950年代頃からKAU内部で急進派が勢いをつけ始め、ギクユ貧農を中心に構成された「ケニア土地自由軍」（Kenya Land and Freedom Army）が生まれた。1952年、アフリカ人首長の暗殺事件を機に植民地政府はケニア中央全土に非常事態を宣言した。ケニヤッタをはじめ多くのKAU幹部が逮捕された。ケニア土地自由軍は「土地の奪還と白人の追放」をスローガンとし、団結を固めるため宣誓の儀式を行い、白人農場主やアフリカ人首長の屋敷を襲撃した。植民地政府はアフリカ人新聞・団体の統制、印刷物の許可制、弁務官によるアフリカ人逮捕の自由、ギクユ独立学校の閉鎖など防御策をとった。一方、ケニア土地自由軍側は弾圧を逃れて森林地帯に入り、巧みなゲリラ戦に出た。食糧や武器を供給し支援していた農民とゲリラとの分断を図るため、植民地政府は強制収容所を建設し村人を収容した。

1956年、土地自由軍の最高指導者であったデダン・キマジが逮捕され、翌年に処刑されたことでマウマウ闘争は一応の終結を見せたが、ケニア土地自由軍の一部はその後活動を続け、非常事態は1959年まで続いた。1963年にケニヤッタが釈放され、同年、ケニアはイギリス連邦の自治国として独立を果たした。ケニヤッタは初代首相として就任し、翌年、共和制への移行に伴い初代大統領になった（宮本・松田編 1997: 436-441）。

2. 『川を隔てて』に見られる土地意識

『川を隔てて』は、グギがマケレレ大学在学中に執筆した作品である。グギは同大学のノースコート寮に居住し、寮に共同体の「精神」を吹き込んでいた学寮長ヒュー・ディンウィッディーの影響を受けたという。同作はディンウィッディーと改訂の相談を重ね、『黒い救世主（*The Black Messiah*）』という題名で執筆された。のちに改訂され、『川を隔てて』として出版された（Sicherman 1990: 4-5）。

背景は白人の到来から1930年代にかけて、ギクユ独立学校運動の時代である。川を隔てて向かい合う秘境の地にあるカメノとマクユの村は伝統をそのまま残し、共同体として平和に暮らしていた。そこに、カメノの偉大な予言者ムゴ・ワ・キビロがかつて予言したとおり白人が現れ、近くにキリスト教の伝道根拠地が設立されたことをきっかけに、カメノとマクユが対立するようになる。マクユの住人ジョシュアは真っ先にキリスト教に改宗し、民族の慣習を捨て教会の牧師となる。ジョシュアの娘ムゾニはキリスト教徒と民族の慣習の両方を望み、割礼で受けた傷が悪化し死んでしまう。ムゴの末裔であるカメノの長老チ

エゲは息子ワイヤキが救世主になると信じ、白人の知識を学ばせるためにワイヤキをシリアナにあるミッションスクールへ送り込む。しかし、ワイヤキはスクールが禁止する割礼を受けたため放校処分となり、同じく放校処分を受けたカマウやキヌジアとギクユ独自の民族学校を運営するようになる。ワイヤキはミッション教育と伝統文化の狭間で葛藤し、自らが救世主となるべく模索するが、ジョシュアの娘ニャンブラと恋仲にあったために裏切りを疑われてしまう。

本作品の主題は、キリスト教と手を結んだ植民地主義がケニアの伝統や儀式、慣習・生活様式を弾圧したことにより、本来一つの共同体であった二つの村が、川を隔ててキリスト教受容と伝統宗教保守に分かれ対立することにある。こうした分断を解決する道筋は土地をもとにした共同体のあり方に見出せるのではないだろうか。

2.1. 土地の搾取

舞台となる秘境の地カメノとマクユの間には癒やしとよみがえりを意味する生命の川、ホニア川が流れ、二つの村を結びつけている。「古より変わらぬ丘や谷は、この土地の心であり魂でもあった。民族の魔術と儀式が純粋で汚れないまま守られてきた」(Ngugi 1965:3)。人と自然は一体となり、人びとが共有する土地の慣習が人びとを一つにまとめて共同体を作り上げていた。

カメノには大地が盛り上がった小さな丘があり、ギクユとムンビがムルングとともにそこに立ち寄りこう言ったと噂されていた。「この土地をそなたらに授けよう、男と女よ。この地をそなたらと子孫が治め、耕すがよい」(Ngugi 1965:2)。創世の神話は土地が自分たちのものである根拠であり、人びとが同じ始祖ギクユとムンビの子であるという意識を強める。ケニヤッタが述べるように、農耕民であるギクユの人びとは完全に土地に依存しており、土地は生活に必要な物資を与えるだけでなく、彼らの精神的・知的な充足をもたらす根源なのである(ケニヤッタ 1962: 32)。

このムルングから与えられ、人びとの精神と生活を支える共同体の土台であった土地が搾取されていく様は、雨の情景と重ね合わせて象徴的に描き出されている。雨が大地の土を削り取っていく物理的な侵食は、じわじわと押し寄せ、村を支配していく白人の脅威を映し出しているのである。それと並行して、ワイヤキたちの間で谷全体に起っている事態について議論が交わされていく。シリアナ近郊では白人による土地収奪により、多くの人々が長年住み慣れた土地を離れることを余儀なくされていた。一方で、中にはその場に留まり、奪われた土地で白人の政府に税金を払うため労働に従事する者もいた。「何か手を打たなければならない」(Ngugi 1965: 62)という切実な思いはいつそう強まっていた。雨は容赦なく降り続け、白人の支配も緩むことなく伸び続ける。雨が激しさを増すともに議論も白熱していく。

雨がやむ気配はなく、小さな流れは交わり合い、大きな流れに変わっていく。ホニア川は生命の川であり、村を結びつける。それに対して、雨は恵みを与えるが、大地を削り取り、肥沃な土を押し流してしまう悪にもなり得る。小さな流れがひそかに土を運び去る光景は白人の侵入、土地の搾取、支配のイメージとぴったりと重なり合うのである。

土を運び去っていく
大地を浸食し、食い尽くす
土地を奪っていく

それが叫びであった。村々に響き渡る叫びだった。眠れる獅子たちは、もはや眠り続けることはないだろう。皆、土を求めて叫んでいたからだ。大地は民族にとって重要なものだった。だからこそ、キヌジアや彼のような人たちは白人の侵入を恐れたのである(Ngugi 1965: 65)。

ギクユにとって民族の魂である土地が奪われることは何よりも脅威となる。雨が土を痩せさせるように、白人の侵入は民族を弱めてしまう。白人の侵入がもたらしたキリスト教により、すでにマクユの住人ジョシュアたちは土地の慣習を捨て、マクユとカメノには亀裂が生じている。チェゲはジョシュアたちのキリスト教への改宗がもたらす危機を言い当てていた。「ジョシュアの仲間たちはこの土地に多くの分裂をもたらし、民族を滅ぼすであろう」(Ngugi 1965: 37)

ワイヤキに突然、怒りがこみ上げた。白人に対してでもキヌジアに対してでもない。雨に怒ったのである。雨は土を運び去っていた。ここだけでなく至る所で。ある地域で土地が痩せる一方だったのはそのためだった。しばらく雨と戦いたい気分になった。激しく降り続く水滴は污水や泥へと変わっていた。やがて怒りは静まった。今度は心から笑いたくなった。ワイヤキはこの自然現象の中にさえ、矛盾を見出していた。雨は必ず土に触れる。その接触は祝福にも呪いにもなり得るのだ。

(Ngugi 1965: 65-66)。

雨は作物の成長には欠かせないものであるが、多すぎる雨は大きな流れとなり大切な土を押し流してしまう。同様に、ミッション教育は独立と成長に必要な知識を与えてくれるが、その影響が強まれば伝統的な共同体の土壌を浸食していく危険性を孕んでいる。新しい価値観の流入は、人びとを土地の慣習から切り離し、共同体の結束を内側から弱めてしまうという矛盾を内包しているのである。しかし、ワイヤキは雨の矛盾に気づきながらも、

教育への理想をひたすら追い求めていくのである。そして、雨が地面に触れないわけにはいかないように、外部の影響が入り込んでくることもまた、避けることのできない必然なのである。

2.2. 割礼と創世の神話

『川を隔てて』において、土地の景観と神話が結びついたイメージは、ばらばらになった村々に共同体としての結びつきを与えている。さらにギクユの偉人ムゴ・ワ・キビロの予言が組み込まれ、ギクユの独特の世界観を作り出している。

割礼は土地の慣習の中でもっとも民族の結束を強めるものであり、ギクユの生活様式の中心的儀式である。本作品では、割礼の前に、祖先とのつながりを得て民族の子として生まれ変わる「セカンドバース」の儀式が行われる。セカンドバースを終えたワイヤキは父チェゲに連れられ、神聖な丘に立つ。この光景は統一のイメージとしてワイヤキの脳裏に焼き付く。はるか遠く、雲がかかったケニア山の山頂はかすかに輝きを放って創造主ムルングの座を示し、敵対するカメノとマクユも、ここでは一つの美しい土地として溶け合っている。それは同時に、土地と創造主ムルング、創世の神話を再認識させる。そのとき、ワイヤキはチェゲから自分が予言者ムゴの末裔であることを告げられるのである。それは救世主として人びとを導き救う責任があることを意味する。

迎えた割礼の日、ナイフが主人公ワイヤキに振り下ろされる。「血がたらたらと滴り落ち、大地に吸い込まれていった。ワイヤキの血が神への捧げものであるかのように、この日からワイヤキは大地と宗教的な絆で結ばれた」(Ngugi 1965: 45)。祖先とムルングとのつながりは、大地に滴る血を介してより確かなものになった。このように大地は結束の象徴であり、土地の慣習は大地と人びとを物質的にも精神的にも結びつけるのである。

割礼を受けたムゾニの死をきっかけに教会は割礼を禁止する。教会から多くのギクユ人が離脱し、ミッションスクールからも多くのギクユ人生徒が去った。ワイヤキは最初のギクユ独立学校を創設し、白人支配に対抗するものとしてミッション教育をもとにした民族や宗教を超えた団結を望む。高度な教育を目指すワイヤキだが、白人の知識を学ぶためミッションスクールに行き村から離れていたため、彼は民族にもっとも重要なことに触れる機会がなかった。父チェゲは警告していた。「白人の知恵と秘密をすべて学んでくるのだ。しかし、その悪習に従ってはならない。民に忠実であれ、祖先の儀式に背くな」(Ngugi 1965: 20)と。

ワイヤキがニャンブラとの恋愛により民族への裏切りを疑われる中、人びとに「今こそ力を合わせよう」と訴えるため、最初に語ったのはギクユの創世の神話だった。「はるか昔、もののはじめのことだった。創造主ムルングが民族の父であり母であるギクユとムンビをおつくりになった」(Ngugi 1965: 148)、「我々は皆、ギクユとムンビの子であり、一致団結

して共に闘わなければならない」(Ngugi 1965: 149)。

エドワード・W・サイードは『文化と帝国主義』(サイード 2001)において、抵抗する者たちが、抵抗の初期段階で統一するために必要なイデオロギー的基盤を見つけるには帝国主義の諸過程が排除した彼らの過去の歴史を再発見し、その意義を復権しなければならないと述べている(サイード 2001: 34-35)。グギが結束の根拠を過去へ過去へとさかのぼっているのはそのためだろう。グギは神話や土地との関係に焦点を当てることによってイデオロギーの基盤を見つけようとしているのではないだろうか。

白人の支配に対抗しようとするギクユの人びとを一つにまとめたのは、大地を奪われた屈辱の思いと、共有する伝統文化を守ろうとする強い思いであった。しかし、もはやキリスト文化の流入は避けられない必然となっていた。キリスト教と伝統文化の統合を試み、割礼を受けたムゾニは死を遂げた。白人支配に対抗するために教育に希望を見出し、民族や宗教を超えた団結を望んだワイヤキもまた、裏切りを疑われ理想を達成できずに終わるのである。しかし、彼らは創造主から与えられた一つの土地に住んでおり、祖先をさかのぼればギクユとムンビにたどりつく。対立をよそに変わらず流れ続ける命の川、ホニア川が二つの村を結びつけているように、土地に根ざした共同体の意識こそが、分断された人びとをつなぎ止める絆なのではないだろうか。

3. 『泣くな、わが子よ』に見られる土地意識

『泣くな、わが子よ』は初期三部作の中でも、もっとも土地意識が強く現れている作品である。また、グギの自伝的要素が強いとされている。グギ自身であることは否定しているものの、作家が境遇に強く影響されることは認めている。

背景は 1940 年代からの第二次世界大戦後からマウマウ闘争が繰り広げられる民族主義高揚の時代である。ゴゾは白人に土地を奪われ、アフリカ人ジャコボが所有する祖先の土地にムホイ(借地人)としてお情けで暮らしながら、白人入植者ハウランズの土地で作男として働いている。イギリス人であるハウランズは第一次世界大戦に召集され栄光を信じて参加したが、流血と恐ろしい破壊を体験したのち「平和」に幻滅し、逃げるようにアフリカにやってきた。この地で子供に恵まれるが祖国で勉強させた長男が第二次世界大戦に召集されて命を落とす。息子を死に迫りやっったイギリスに再び裏切られたと感じたハウランズは、それ以降、土地を唯一の生きがいとするようになる。一方、ゴゾの息子ムアンギとボロも第二次世界大戦に召集され、ムアンギは戦死し、帰還後に抵抗運動に加わったボロは復讐に燃えて森に入る。ゴゾの末息子のジョローゲは家族の期待を背負い小学校へ入学し、教育を受けることで救世主になれると夢みる。ゴゾはアフリカ人たちによるストライキで、白人の手先になったジャコボに衝動的に殴りかかる。ストライキは失敗に終わり、ゴゾはハウランズの土地で働くことも、ジャコボの土地を借りて住むこともできなくなっ

てしまう。非常事態宣言が出され緊張が高まっていたある日、ジャコボが殺される。ゴゾは犯人として疑われる息子カマウをかばって罪を自白し、拷問がもとで死んでしまう。高等学校へ進学したジョローゲも拷問を受け、放校処分となる。希望を失ったジョローゲは自殺を図ろうとするが、夜間外出禁止令を犯してまで捜しにきた母親を見て、自分が臆病で責任から逃げていたことに気づく。

本稿では、本作品における土地を巡る関係と、それぞれの土地意識に焦点を当てて考察したい。また、土地の喪失がもたらす家庭崩壊は土地の持つ役割を明らかにしている。家庭の崩壊は共同体の不調和を表しており、崩れゆく家族の絆をとおして共同体による団結と行動の参加の必要性を説いているのである。

3.1. それぞれの土地意識

ゴゾは家に集まった家族や村の若者に、ギクユに伝わるギクユとムンビの創世の神話と土地が奪われるに至った経緯を聞かせる。長い夜の退屈な時間を紛らわす物語が昔と違うのは、創世の神話がムルングから土地を与えられた記憶であるだけでなく、白人による土地の収奪や支配の物語につながっていることである。創世の神話は、奪われた土地が本来ギクユのものであるという正当性を示す根拠となるものであるが、現実には植民地支配下で奪われてしまっている。ゴゾが住む土地は確かに祖先の土地だが、今はアフリカ人ジャコボが所有している。ゴゾが作男として働く白人ハウランズの土地も、かつてはゴゾの父が所有し、ゴゾや息子たちが受け継ぐはずだったものである。

ケニヤッタは、土地がギクユの生きている人びとも、すでに死んだ祖先も、まだ生まれていない子孫も結びつけていることは明らかな事実だとしている。なぜなら、祖先が眠っているのは先祖代々の土地であり、祖先が住んでいた土地だからである。この土地をとおして死者は生者と直接交わりを保つことができるのである。(ケニヤッタ 1962: 175)

土地は祖先と子孫を結びつけ、民族を結束させる鍵となるものである。このような祖先とのつながりを持つ土地を何より大切に考えているのがゴゾである。ゴゾは「土地こそがすべてだ」(Ngugi 1987: 39)ということを知っており、ジョローゲに受けさせている教育も、奪われた土地を取り戻すための手段としての価値しかないと考えている。土地への思いが人一倍強いゴゾは、本作品を通して土地搾取への抗議の中心にいる。

ここでは、一つの土地をめぐる白人入植者のハウランズとアフリカ人農民のゴゾの土地意識に注目したい。「ヨーロッパ入植者は、自らの過去と祖先伝来の遺産に自信を持つ人たちに本能的な脅威を感じ、恐れていた。そうでなければ、どうして彼らは、アフリカ人が本当の神を知り、文化を有し、意義深い過去を持っているということを否定するために、その軍事力、その宗教的情熱、その知的エネルギーを傾注する必要があったのか」(グギ 1985: 30)というグギの言葉に見られるように、土地だけでなく背後にある精神的・文化的

アイデンティティーの面においても、ゴゾはハウランズに対抗する存在だといえる。ハウランズがケニア植民者の典型であるのに対し、ゴゾは入植者を脅かすギクユとムンビに基づく伝統と文化を継承するアフリカ人の典型的なものである。

ゴゾとハウランズは同じ土地に対して強い執着を持つが、その執着のしかたや背景は全く異なる。ゴゾとハウランズはともに土地を称賛するが、それはうわべだけを結びつけるもので、感情の奥深いところで二人を大きく分けている。ハウランズにとって土地は征服する責任を感じるものであり、裏切られたイギリスからの逃げ場所であり、自分より前に誰かが土地を所有して耕していたという考えは全く持ち合わせていない。対照的にゴゾにとって土地は自分の一部であり、精神のよりどころであり、子孫に土地を受け渡す責任がある。両者が感じている責任は全く異質なものである。

ハウランズはケニアの土地に全身全霊を傾ける。土地は傷ついたハウランズの救いの神となる。「彼にとって神はただ一つ – それは自ら作り上げた農場であり、飼いならしてきた土地であった」(Ngugi 1987: 76)。しかしそれは作物の出来によって結果が出る畑としての土地でしかない。ハウランズにとっては文化も伝統も持たない物質であり、故郷であるイギリスの代わりでしかないのである。そのため、ハウランズはどこにも根を張ることができない。土地を征服し自分の所有であることを主張して誰のものにもならないようにしがみつかなければならないのである。「農場は彼が口説き落とし、征服した女のようなものだった。ほかの誰かに奪われないよう見張っておかなければならなかった」(Ngugi 1987: 127)。土地を征服する満足感アフリカ人を服従させる悦びへと変質していく。さらに農場の一部のように感じていたゴゾが彼の邪魔をする存在に変わると、狂氣的なまでにゴゾを拷問し、力づくで屈服させようとする。しかし、家族を守ろうとするゴゾの精神までは征服することができなかった。

ハウランズに対し、ゴゾにとって土地は代わりのないものである。土地は祖先やギクユとムンビとの交わり場であり、ゴゾは土地と接することで活力を得て、家庭をしっかりと結びつけていた。しかし、ストライキの失敗によりムホイとして暮らしていたジャコボの土地を追い出され、ハウランズの畑で働くこともできなくなる。祖先の土地から完全に隔絶されたゴゾは、祖先とのつながりを断たれ、精神的に衰えていく。

ゴゾにとって、土地の喪失は精神の喪失であった。祖先の土地から切り離された今、どこで創造主に犠牲を捧げればよいのか。どうすれば民族の始祖であるギクユとムンビとつながることができるのか(Ngugi 1987: 74)。

その後、ゴゾはジャコボ殺しの犯人として名乗り出て厳しい拷問を受ける。「こんな災難が降りかかる前から、ゴゾの人生は意味を失っていた。大切にしていたものから引き離さ

れてしまったのだから」(Ngugi 1987: 119)。ゴゾにとって、土地は命とも言えるものであった。

3.2. 土地の喪失がもたらす家庭崩壊

ゴゾは逆境にもかかわらず、しっかりした家庭を築いている。ゴゾを中心に家族が一つにまとまった一夫多妻の家庭はギクユの伝統社会の理想の形であり、ゴゾは共同体の中でも中心的役割を果たす人物である。どんな状況に陥ろうと、ゴゾの目は常に土地と家庭に向いている。土地は団結、結合、家族のキーポイントとなっている。

ゴゾを中心とした平和な家族に崩壊をもたらすのは、土地の喪失と戦争による文化の不継承である。ケニヤッタによると、ヨーロッパ人はギクユの民衆から彼らの土地を奪うとともに、家族と民族を結びつける物質的象徴をも奪い、それによりヨーロッパ人はギクユの社会的、道徳的、経済的生活の全てからその基礎を断ち切った(ケニヤッタ 1962: 256)。土地を奪うことは家族の密接な結びつきを根底から切り崩し、それは民族の調和と結束をも揺るがすことになるのである。

グギがまだ幼い頃、共同体全体の一員として、夜には炉端を囲んで民話を語り合う時間を過ごしたという。そこで語られた内容は、弱者が知恵を使って強者を打ち負かす動物の話や、共同社会で理想とされる協力により鬼や野獣に対抗する人間が中心の話などがあった(グギ 1987: 28-29)。また、ケニヤッタもギクユの文化と歴史の伝統は、物語の話し方や目の前で演じられる臨場感によって、幼い頃より精神像に刻まれ、継承されてきたと述べている(ケニヤッタ 1962: 3-4)。これらは教育の役割を果たすとともに、共同体の精神を伝えるものであり、このようなお話を知らないことは、民族に生きる自分のあり方を見出す機会を失ったことを意味する。

しかし、ゴゾの息子ボロは第二次世界大戦に従軍したことで、こうした伝統や文化を継承する機会を奪われた。物語をとおして年配者から若者へと伝えられる民族の精神を育むことができなかったのである。ゴゾが語る土地を奪われた屈辱の物語は、ボロには無力な男のつぶやきにしか聞こえず、予言を信じつづける父の姿も、行動を恐れる臆病者の言い訳にしか思えない。「予言なんてくそ食らえ」(Ngugi 1987: 27)、「どうして自分の土地を奪った奴のために働き続けることができるんだ？ どうして仕え続けられるんだ？」(Ngugi 1987: 27)。ボロの言葉はとげのようにゴゾに鋭く突き刺さる。一方、ギクユの伝統や文化がその身に深く刻まれているゴゾにとっては、ムゴの予言は疑いようのないものであり、いつか土地は帰ってくるという希望のよりどころであった。ゴゾはギクユの遺産である土地を子孫につなぐ責任を背負い、ハウランズのもとで働いて土地を守っていたのである。それがゴゾの無行動の理由である。しかし、いつか差し伸べられるであろう他者の力に頼ったゴゾの夢が実現することはない。

しかし、かつてゴゾを蔑み飛び出したボロは、死を間際にしたゴゾのもとに帰還する。自分の身を犠牲にしてまで息子を救おうとした父親の勇氣ある行動が、父子の間にあった深い断絶を埋めたのである。これにより、ゴゾは失われていた父としての威厳を回復し、崩壊しかけていた家族は再び一つになる。一つにまとまった家族は、ギクユの結束のもっとも要となる部分である。ゴゾは家族の長として、また共同体の一員としての責任を果たすことにより、ボロの歩み寄りを可能にしたのである。この父子の和解は、世代間の和解として物語に希望を与えるものである。

ゴゾの最期の言葉「よし、精一杯戦え。ムルングとルリリに目を向けろ。おまえたちに平和あれ……ハッ！ ジョローゲ、母さんを……頼んだ……ぞ」(Ngugi 1987: 124)は、引き継がれるべき精神が何であるかを指し示している。

ギクユ語－英語辞書 (Benson 1964) によると、「ルリリ」*ruriri* とは"tribe, nation"を意味する。つまり、ここでいうルリリはギクユ民族を指している。ギクユの構成単位は家族を基本としているが、ここでは、ムバリ(家族集団)でもムヒリガ(氏族)でもなくルリリという言葉が用いられている。「ムルング(神)とルリリ(ギクユ民族)に目を向けろ」というのは、「個人」、そして「家族」の単位を越え、共通の神のもとに結ばれた「民族」の集団の力に目を向けよということではないだろうか。集団の力への期待、共同体における結束の必要性を、ゴゾは復讐心に燃えた息子に伝えているのである。

ゴゾの世代は土地を奪われながらも予言を信じて待ちつづけ、決断と行動の機を逸した。行動力に欠け、抑圧と搾取に団結して立ち向かうことはできなかったが、ギクユ創世の神話をはじめとしたギクユの伝統や文化をしっかりと持ち、自分が何者であるかが分かっている。ゴゾの土地意識は、常にこうした民族の精神と一体だったのである。

ボロの世代は、土地を奪った植民地支配者のみならず、土地を奪われながらも静観し続けた父親の世代に対しても強い憤りを抱いている。抑圧と不平等に満ちた社会を鋭く批判し、その負のエネルギーは抵抗運動という形で爆発する。ボロは団結の必要性を説き、土地の奪還のため行動するが、土地と一体となった伝統文化や共同体の精神が欠けている。そのため、闘いを続けるうちにその行動は個人的な復讐心に覆われ、ボロは抜け殻のようになっていく。足下の精神的地盤は脆く、父親に対して宣誓の強要をするなど、伝統社会の道徳を覆す行動をとってしまうのである。

ゴゾは最期に、ボロに欠けていた民族のつながりの大切さを伝えたのである。それは、宣誓による形式的な結束ではなく、ギクユという祖先をともしする精神的つながりを再認識させることで得られる「真の結束」であった。ゴゾは土地を相続させることはできなかったが、それを伝えることで、後裔が忘れてはならないもっとも大切な精神を継承させることに成功した。これこそがゴゾの真の強さであり、ハウランズが決して征服できなかったものである。ゴゾは家族とギクユの精神にすべてを託したのである。

4. 『一粒の麦』に見られる土地意識

これまで見てきた『川を隔てて』、『泣くな、わが子よ』が線条的時間の流れの枠に収まった作品なのに対し、『一粒の麦』は多層的な時間と空間が織り成す技法を用いることで、中心的登場人物による一定の視点から、多様な人びとが持つさまざまな視点となり、作品をより厚みのあるものとしている。それにより、前二作のような一人の主人公が救世主となって抑圧下で苦渋の生活を送る人びとを救い出そうとする「個による力」に焦点が当たっていた。しかし本作品では、過酷な状況を生きぬいた個々が独立という一つの目的のためにともに手を取り合う「集団的な力」へと転換している。宮本正興は、アフリカ社会において、個人の存在と行動は集団の中に位置づけられることで初めて社会的意味を持つとし、本作品に特定の主人公といえる人物は登場しないと述べている。宮本が指摘する「ひとつの状況全体」という主人公のあり方は（宮本 1989: 55）、ザバイの村の共同体そのものが物語の主人公であると言い換えることができるだろう。個人の体験は集団の体験であり、個人の意識は集団の意識となるのである。

物語は、ケニアが独立を勝ち取る 1963 年 12 月 12 日の 4 日前から始まる。ザバイの村はまだ非常事態の恐怖と混乱を残している。ケニアの土地奪還のため闘ったこの村の英雄キヒカは誰かに裏切られて捕まり、木に首を吊られ処刑された。独立を 4 日後に控え、キヒカを死に追いやった裏切り者捜しが進められる中、人びとの脳裏に焼きついた記憶がフラッシュバックを繰り返しながら物語が展開されていく。主要な登場人物はムゴ、ムンビ、ギコニョ、カランジャの 4 人である。ムゴは収容所にいる間に土地を没収され、帰還後は村の長老が譲ってくれた土地を耕して生計を立て、人との接触を断ってきた。キヒカの妹であるムンビは、夫ギコニョが収容所にいる間も懸命に一家を支え、貞節を守り続けてきたが、夫の帰還を知らせに来たカランジャに身をまかせ、子を宿してしまう。ギコニョはつらい収容所生活の中で妻ムンビに会いたい一心から宣誓を自白するが、帰還後、ムンビがカランジャとの間の子供を出産していたという現実直面する。カランジャは白人の手先となっていたため、キヒカを裏切った人物としてもっとも疑われている。各々が何かしらの罪の意識や苦悩を抱える。

4.1. 揺らぐ大地

植民地支配下の土地の搾取が、ギクユに与えた衝撃は大きかった。マウマウ闘争において彼らが闘った背景には土地に対する感情や意識があり、思考や行動の基盤となっている。この根底にあるのは、創造主から始祖ギクユとムンビに与えられた土地を中心に織り成すギクユの世界観である。それが人びとを支え、団結させ、土地の奪還という共通の目的へと向かわせたのである。闘いは自分一人の土地を得るためだけのものではなく、ケニアという大きな視野のもとにあった。

こうした大きな視野を体現しているのがキヒカである。キヒカの父親は受け継ぐ土地がありながらも土地奪還のため森に入ったキヒカが理解できない。しかし、キヒカが見ているのは、個人が所有する土地というレベルではなく、ギクユという民族を超え、土地を奪われ搾取されつづけるケニア全体なのである。「ケニアは黒人のものだ」と言うキヒカの心には「ケニアは母だ」(Ngugi 1986: 89)という思いがある。

ケニア全体のことを考えるキヒカとは対照的に、自らの土地を所有することに強い執着をもつのがムゴである。ムゴは世間との接触を絶ち、土地や未来を守るためキヒカを裏切るが、皮肉にもその罪の意識ゆえに逃げてきた闘争の中心に巻き込まれていくことになる。ムゴに欠けているのは共同体とのつながりである。

幼い頃に両親をなくしたムゴにとって、畑仕事に精を出す時間は心が満たされるひとときであり、孤独な人生における希望そのものであった。1952年に非常事態が宣言されてもムゴは世間との接触を避け続けていた。しかし、社会から自分を遮断してくれる唯一の安全な場所であったはずの家に、キヒカがムゴを仲間に引き入れようとして入ってくる。キヒカを助けずに殺されるか、助けて政府に捕まるか。追い詰められたムゴが出した結論は、キヒカの居場所を密告することであった。ムゴは土地を持ち、いつか妻子を持つであろう自分の未来を守りたかったのである。

キヒカを裏切り、抑圧者に味方した犯した罪の大きさにムゴが気づいたとき、足下の地面が崩れ落ちる。「突然、地面が崩れた。ムゴは転落していった。ぐっと腕を伸ばした。底はあまりに深く、暗闇だけが広がっていたが、そこには尖った石が突き出ていると分かっていた」(Ngugi 1986: 200)。大地から転落したムゴは、手を伸ばしても大地には達することができない。「地面が再び回り始め、その速度を増していった」(Ngugi 1986: 200)。ムゴは逃れようのない虚無へと飲み込まれていくのである。

ムゴはキヒカを裏切ったことで混乱の中心に引きずり込まれ、収容所に送られる。帰還すると土地は政府に没収されており、今では村の長老から借りた痩せた畑を耕している。キヒカを裏切った罪の意識から、以前のような畑への情熱はすっかり消え失せていた。土地やケニア全体のために命を懸けて闘うキヒカを死に迫りやっめたムゴの行為は、まさに大地への裏切りだったといえる。今や畑を耕しても手応えはなく、かつてあれだけあった土地への愛着も、もはや失われてしまったのである。

『一粒の麦』は前二作に比べると、直接的には土地意識にあまり重きを置いてはいない。しかし、土地意識がマウマウ闘争の原動力となり、ザバイの人びとの世界観を根底で支えていることは疑いようがない。大地のイメージが作品全体を覆っており、ザバイと共同体の人びとを大きくふんわりと、しかし確実に包み込んでいるという印象を受ける。本作品の中では上述の場面以外にも、重要な場面で大地が揺らぎ回るシーンが度々描かれている。大地の揺れは、人びとを襲う大きな恐怖や衝撃から、ひっそりと起こった出来事まで、そ

の意味を考えさせる余韻を与えている。ギクユの人びとの精神的世界を作り出している土地が揺らぐことで、自らの存在の揺らぎ、自分を取り巻く世界の崩壊、さらには逃れようのない不安や恐怖が描き出されている。本来、あらゆる恵みを与えてくれるはずの土地が揺らぐことはその人の立脚点をも揺るがす衝撃を表す。それは個人の内面に留まらず、ザバイ全体の衝撃として伝わり、個々の出来事が集団の出来事としての重みを持つ。

4.2. ギコニョとムンビ

グギはケニアのために闘ったキヒカの妹ムンビに不思議な力を与えている。その力は、キヒカを裏切った罪の意識と恐怖からいっそう内側へとももるようになったムゴを孤独の殻から引きずりだし、過去に向き合わせ、罪を告白させる。ギクユの始祖ムンビと同じ名を持つ彼女を見つめたとき、ムゴはムンビの目の奥に大地を見出した。ムンビは自らも罪の意識を抱えながらも、人びとを包み込むまさに大地のようなあたたかさを持つ。幼い頃からさまざまな物語を聞いて育ち、土地に根付く伝統をしっかりと吸収しているムンビはギクユの大地の象徴的存在である。ムンビはムゴに共同体の一員としての役割を自覚させ、自らが負うべき責任に気づかせるのである。ムゴが集会で罪を認めようと決めたのは「こうするほかに、どうすればムンビに顔向けができるのか」(Ngugi 1986: 235)という思いからであった。それは、大地の象徴であるムンビに顔向けができない、すなわち彼女が体現する共同体に顔向けができない、と捉えることができるだろう。大会衆の中を前進するムゴの心の中には迷いがない。「あそこに立ち、みんなの前で罪を認めるのだ」(Ngugi 1986: 235)。ムゴは過去と向き合い、聴衆の前で罪を告白することで初めて共同体への責任を果たしたのである。

このようにキヒカを裏切ったムゴは、大地の象徴であるムンビとの対話を通じて、ようやく共同体への責任を自覚して罪を告白する。そして、ムゴの告白はそれぞれ罪の意識を持つザバイの人びとに過去を見つめさせ、ザバイ全体の浄化の役割を果たす。これにより、閉ざされていたコミュニケーションを回復し、共同体を本来あるべき状態へと再生させるのである。闘いの中で命を落としていった人びとの思いも、大地を通して浄化され、「一粒の麦」のように再び新しい芽となって残された共同体に引き継がれるのである。

ムンビの夫ギコニョの名もまた始祖ギクユの名を想起させる。始祖ギクユとムンビと同じ名を受け継いだこの夫婦の和解は、大地とのつながりの回復であり、共同体の一員としての再生を意味している。それは同時に、新たな責任を担う共同体への生まれ変わりを示しているのである。また、ギコニョとムンビの不和は大地の不和、民族の不和を投影しており、二人の和解は大地の和解、ひいては共同体の再構築を象徴している。この再生のプロセスが、独立を目前に控えたケニアに希望を与えるのである。

『川を隔てて』、『泣くな、わが子よ』では、個人が救世主となって人びとを救おうとす

るが失敗に終わっている。しかし『一粒の麦』では救世主は現れず、共同体の一人ひとりがそれぞれの持つ弱さを克服し、他者と関わり合うことに解決の糸口を求めている。本作品は、独立を目前に共同体に生きる各々にその責任を負う覚悟を促すことで、新生ケニアの未来を集団の力に託しているのである。

5. おわりに

本稿では『川を隔てて』、『泣くな、わが子よ』、『一粒の麦』の初期三部作を通じ、グギが描いた多様な土地意識を考察してきた。創世の神話はギクユの人びとに土地所有の正当性を証明するだけでなく、同じ始祖を持つ同胞であることを意識させ、人びとの心を結束させる役割を果たす。『川を隔てて』において、雨の情景と重ねて描かれる土地の搾取は共同体に分断をもたらす一方で、割礼の慣習は民族の結束を強固にし、祖先やムルングとの絆を確かなものにしていった。『泣くな、わが子よ』では、土地は命そのものとして描かれており、祖先から受け継ぎ子孫へと継承させるべき土地を失うことは精神の喪失であり、家庭の崩壊を招くほどの影響力を持っていた。そして、『一粒の麦』では、土地は人びとを包み込み、土地の揺らぎは人びとの内面を激しく揺るがすほどの衝撃を与えるものとして描かれていた。

『ケニヤ山のふもと』で述べられているように、ギクユにとって大地は何よりも神聖なものであり、人びとの精神的・知的な満足は土地との関わりによって達成される。また、祖先の霊との交わりは祖先たちが眠る土地に接することによって永続化されるのであり、永遠の誓いもまた大地にかけておこなわれるものであった(ケニヤッタ 1962: 32)。

本稿の考察を通じて、土地は人びとの魂であり、精神のよりどころであり、あらゆる行動の基盤となっていることが明らかとなった。ギクユの慣習や生活様式や社会組織といった文化は土地の上に成り立っており、文化に対する意識は土地意識そのものであるといってもよいだろう。グギが土地や伝統文化を描くのは、ギクユを語るうえで切っても切り離せないだけでなく、ギクユの人びとのアイデンティティの根源を見出しているからだと考えられる。

ギクユの人びとは土地とともに生き、何よりも大切にしてきた。そして、土地と土地の上に成立する伝統的な慣習や祖先とのつながりが人びとを固く結びつけている。こうした土地への強い思いこそが、土地を奪われる状況下において人びとをつなぎ止める精神的な支えとなったのである。独立を勝ち取った彼らに土地は戻っては来なかったが、土地を介して共有される文化や概念は、今なお人びとを共同体として結びつけている。そして、共同体の一員である以上、個人は何らかの責任を負わなければならない。グギはこの土地意識に基づく共同体にケニアの未来を託し、ケニアの大地に団結への希望を見出したのである。『川を隔てて』、『泣くな、わが子よ』、『一粒の麦』の初期三部作に見られる多様な土地

意識は、人びとを結びつけ、ケニアの未来を築きあげる「力」となるものであると結論づけたい。

参考文献

- グギ・ワ・ジオンゴ. 宮本正興・楠瀬佳子訳. 1987. 『精神の非植民地化』. 第三書館.
- グギ・ワ・ジオンゴ. 宮本正興編. 1985. アフリカ文学研究会訳. 『アフリカ人はこう考える』. 第三書館.
- ケニヤッタ、ジョモ. 野間寛二郎訳. 1962. 『ケニア山のふもと』. 理論社.
- サイード、エドワード・W. 大橋洋一訳. 2001. 『文化と帝国主義 2』. みすず書房.
- 中川美保子. 2002. 『グギ・ワ・ジオンゴ初期三部作に見られる土地意識』. 大阪外国語大学大学院 言語社会研究科 修士論文（未公刊）.
- 宮本正興. 1989. 『文学から見たアフリカ』. 第三書館.
- 宮本正興・松田素二編. 1997. 『新書アフリカ史』. 講談社.
- Benson, T. G. (ed.). 1964. *Kikuyu-English Dictionary*. Oxford University Press.
- Ngugi wa Thiong'o. 1965. *The River Between*. Heinemann. (First published 1965.)
- 1972. *Homecoming*. Heinemann.
- 1986. *A Grain of Wheat*, Heinemann. (First published 1967.)
- 1987. *Weep Not, Child*. Heinemann. (First published 1964.)
- Sicherman, Carol. 1990. *Ngugi wa Thiong'o: The Making of a Rebel—A Source Book in Kenyan Literature and Resistance*. Hans Zell.